
絆創膏

雀鷗

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆創膏

【Nコード】

N5240N

【作者名】

雀鷄

【あらすじ】

毎日をただ生きていた菅野が、高級そうなスーツにボロボロの靴を履いた、少し奇妙な老人に出会う。

（前書き）

初めて書いた短編です。

拙いところはたくさんあるかと思いますがご容赦ください。

「やばい、よなあ・・・」

菅野は通帳に並ぶあまり多くない桁を見て、思わず溜息をついた。菅野は3流の大学を出た後、そこそ有名所に就職したものの、勉強不足が祟りすぐに同期についていけず、早々とやめてしまった。それからというもの、菅野はバイトで食いつないでいたが、それはあまり実入りはよくなく、まともな定職につきたくてもこんにちの就職の難しさには目も当てられない。実際、菅野は多くの会社を受けたが、全て不採用と言う結果に終わった。既卒者というのもネックになつていた。新卒者ならば、企業としても一貫教育がなされるため、効率の面をあり、企業は新卒者を取りたがる。資格やこれといった特技のない菅野を雇ってくれる企業があるかは今日でなくとも怪しいところだ。

「あーあ、昔に戻りたいなあー」と小声でつぶやいて通帳をしまった。

涼しい銀行を出る。熱い風と共に日差しが菅野の目を焼いた。夏の盛りが過ぎたはずのこの季節、本来ならばそろそろ秋の空気があるってよいものだが・・・どうやら秋も仕事を忘れているようだった。

シャツの胸元をつかんで少しでも風を入れようとしたが、蒸し焼きにするかのような熱気の中では涼しくなかった。

とりあえずは膨らんだ財布で何か買おう。でないと、腹が背についてしまう。

スーパーで買い物を済ませて、菅野は帰路に着いた。寂れた商店街のアーケードをくぐった。電器屋の前で足が止まる。

ガラス越しに置かれたテレビでは音声なしの映像が流れていた。台も違う機種で3台だけ。電器屋も不景気なのだろうか。周りはほとんど都会化しているのも過疎化の原因なのだろう。

テレビには何度か見たことのあるニュース番組が放映されていた。

殺人、猛暑日による熱中症の患者の続出、議員の出馬表明、

夏の風物詩・・・などなど。

その中で菅野の目を引いたのは、不景気でも業績の伸びる企業という見出しだった。

「へえ、こんなご時世でも儲かってる企業かあ。不正でもやってるんじゃないか」などとなんとも適当極まりない感想を漏らした。不正でもなんでもいいから、とりあえず就職したい。なんてことも考える。

そんなときだった。

横に人がいるのに気がついた。

見れば年は60代くらいだろうか。髪に白髪が多く混じっているが、顔つきは若々しい。全体の雰囲気がそう見せているのかもしれない。背はまっすぐで、こんな暑い中だというのにスーツをきっちりと着こなしている。菅野だったならば数分も歩かないうちに音を上げてしまうだろう。

老人も立ち止まってテレビを見ていたが、やがて顔を上げて菅野のほうを見て目を見開いた。ゆっくりと体を向けると、菅野に向かって軽く頭を下げた。つられて菅野も軽く頭を下げる。

「あのう、すみません。この辺りに、大きな象の滑り台のある公園を知らないでしょうか」と言っ、老人はハンカチを額に当てた。

その公園なら菅野の家の近くの場所だ。小さい子がよくいく少し広めの公園だった。

「それなら、商店街を出たところを右に・・・帰り道なので、一緒に行きませんか？」と、一つ提案してみた。ここから歩いて数分だし、帰り道なのは本当なので人と話ながら行くのもいいかなと考えた結果だった。

「おお、ではお言葉に甘えて。お願いいたします」というと、菅野のほうに手を出して「お一つ、持ちましょう」といった。

菅野はスーパールの袋を両手に持っていた訳だがそれほど重いわけではなかったし、年上の人に持たせるのも気が引けたので断ったのだが、老人は「なに、私はこうみえても力が強くてね」と言った。そういうことではないのだが。

そこまで言われては断るのもなんだか悪い気がしたので軽いほうを老人に手渡す。

老人がゆっくりと歩き出して、菅野はあることに気がついた。老人のズボンの裾から見える靴が、とてもぼろぼろなのだ。指先に一円玉大の穴があいてしまっていて、高そうなスーツにはとても不釣り合いに見えた。

「あなたは、この辺りにすんでいるのですか」

菅野の目が下に言っている、老人が話しかけてきた。

「あ、はい。生まれたときからここに住んでます」

「ほう……。私も昔、ほんのわずかな間でしたが、この辺りに住んでいました。ここはいいところですね、緑も多くて」

「田舎ですよ。駅から離れたら人もいないですし」と菅野は少し自嘲気味に言う。「ははは、そこがまたいいんですよ」と老人は皺を深くして笑った。

「ここに住んでいたのは一時期だけだったんですか？」

「ええ、あの時はゆっくりこの町を見る余裕はなかったのですが……。そうだ。そのときの私の話を聞いてくれませんか。退屈かもしれないませんが、着くまでの一興に」と老人は歩調を緩めて菅野に問いかけた。

「……。えっと、じゃあ、聞きます」

人の身の上話などつまらないと考える菅野であったが、この老人にはなんとなくだが興味があつたので老人の歩調に合わせて聞くことにした。

そして老人は歩調と同じく、ゆっくりと話し出した。

私は当時、この世の全てに疲れ果てていた。

42歳という働き盛りに会社をリストラされたのだ。娘と妻には逃げられた。

生活は荒れた。酒を飲み、賭け事に走る。まったく、ダメ人間そのものだったよ。

そのうち借金も出来て、日に日に酷くなるばかりだった。

家を手放して、安いアパートに住むことにした。それがたまたまこの町だった。

「なんだか、想像できませんね」と菅野は言いながら、なんとなく、老人の語るその頃が今の自分と似ているような気がして、少し嫌だった。

「そうかね。まあ年を取ると、人は変わるからなあ」

いや、そういうことじゃないけれども。その高級なスーツを着ているからなんだけれども。菅野は心の中で老人に突っ込みを入れた。

私はふらふらと外を徘徊するようになった。

そして近所の公園のベンチが私の指定席だった。

私はある日、何時ものように汚いジャージを着て、ぼさぼさの髪をとかすこともせず、幽霊のごとくふらふらと歩いて公園のベンチに座った。

目の前で遊んでいる子供を、青い空に浮かぶ雲を、地面を這い回る黒い蟻を、死んだような目で見ていた。

そんな時、子供達が近づいてきて、呆然とする私を無邪気に罵った。私はそれに怒る気力も湧かなくてね、ただ見ていた。すると子供達は反応がないことをいいことに、さらに激しく罵り、ときに石

を投げつけてくる子もいた。

それが2、3日続いた。

すると、悪がきたちが帰った後、一人の男の子が近づいてきた。いつも一人で砂場で遊んでいるひとときわ小さな子だった。

「おじちゃん、だいじょーぶ？」心配そうに私の顔を覗き込んでその子は訊いてきた。

私はその声にすら反応しなかった。無視を決め込んだんだ。するとその子は更に「どこかいたいいたしたの？」と訊いてきた。

わたしが答えないといると、なみだ目になるその子に、私は仕方なく返事をした。

大丈夫、痛いところもないよ、と。

子供は答えてくれたことが嬉しいのか急に笑顔になってね。

わたしはなんだか落ち込んでいる自分が馬鹿らしくなってしまってたよ。

その子はそれから私に質問をして、たくさん自分のことを話した。

「おじちゃんどーしてここにすわってるの？」「どーしておしゃべりしなかったのー？」「ぼくあの青いやねのおうちにすんでるのっ」「ぼくのたからものはね……」

そしてそのうちは傾き、カラスが鳴いた。

「そろそろお家の人心配するから、帰りなさい」と私は言った。

「おじちゃんは？」

「私は……」と言いかけ、家族がいないのが寂しくなり、口を閉ざした。

しかしその子はなにを思ったかポケットをこそこそと探り始めた。そして取り出したのは、一枚の絆創膏。

「おじちゃんのずつく、穴開いてるもんね。これじゃ、帰れないよね？これで、なある？」と言って、私に絆創膏を手渡した。そのとき、わたしは違うことを考えていた。

笑ってくれてもいい。

わたしはその子に、『歩く勇氣』を貰った気がしたんだ。

一枚の絆創膏が、たった一枚の絆創膏をくれたその子供の優しさが、私の心の空っぽだった部分をすっぽりと被ってしまったんだよ。「じゃあ、おじちゃん、またねっ」と言って、その子は飛び跳ねるように帰ってしまった。

私は呆然と見送った。

そして私はそのときから、変わった。

酒をやめ、賭け事をやめ。借金を返すためにむちゃくちゃに働いた。

借金が返せると、自分で事業を起こした。

家庭を作り、趣味を見つけ、家を買った。

一枚の絆創膏が、私の人生を変えたのだ。

「……これでおしまいだ」話終えた老人は菅野のほうをみて薄く笑った。

いつの間にか公園の入口まで来ていた。菅野はスーパーの袋を受け取り、老人に礼を言った。

「……そのあと、その子供とは……？」

「それが、次の日も、その次の日も公園にいったんだが、子供にはあえなくてな。家に言ってみようかともおもったんだが、公園から青い屋根を探しても見つからんし、そうこうしているうちに職の内定が決まって寮に移ることになったのだよ。だからそれっきりなんだ」

老人は菅野のほうに向き直ると、ネクタイを締めなおした。

「案内、どうもありがとう。……それで、君の青い家はどこかな？」

「知っていて話しかけたんですか？」

「面影がなんとなく……という程度だ。確証はなかったんだが。君こそ、いつ思い出したんだね」

「青い屋根つてところです。ボクのうち、次の日からちょうど業者さんに塗り替えてもらったんです。その間は家族で親戚の家に行っていたので……」

「……そうだったのか。君はずいぶん立派になっていて気づけなかったよ」

「おじさんこそ、服装が全然違ってたので思い出せませんでした。……靴だけは昔のままですね」

「ははは、この靴は捨てがたくてね。……そうそう、お礼をしに来たんだったよ」老人はポケットをこそこそと探り、やがて取り出したものを菅野に差し出した。

「よかつたら、私と働いてみる気はないかね。部下達が優秀なせいだ、『こんなご時世でも儲かってる企業』だ。もちろん、『不正』はしていないがね」

「聞いてたんですか……」

古くなり、ぼろぼろになった絆創膏が一枚、老人の手のひらに乗っていた。

（後書き）

長編は難しそうなのでもっと短編を書けたらなあと考えてます。
感想やご指摘お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5240n/>

絆創膏

2010年10月8日14時13分発行